



ホームスクールカミングデイ

野田 洋子

十月一日は小松高校の創立記念日である。吉田歳嗣同窓会長が就任時に挨拶された「地域に開かれた学校」の一環として、その日をホームスクールカミングデイにしたいと提案され、その第一回が前日の九月三十日(日)に実施されました。対象は還暦と初老を迎えた卒業生で、今年には高校十二回と三十二回が該当、またお世話係にあたる高校二十八回の卒業生も出席し、紅葉にはまだ早い青春時代を過ごした学び舎で、懐かしいひとときを過ごしました。

空模様気になる当日、各地より集まって来た同窓生は記念館内を見学し、また人間国宝を二人も排出している美術展示室の作品も鑑賞しました。一方、校歌作詞者北村喜八の、創立六十周年記念に出席したくても病に臥しているためにかなわぬ身の、切々たる望郷の念をしたためた手紙が胸を打つ。このようならずばらしい先輩の作品を所感し

ている我が母校が誇らしく感じたのではないのでしょうか。

九時三十分から階段教室での特別授業が始まるのに先立ち同窓会長が「今日の授業にはテストがありませんので安心して下さい」と挨拶され満員の教室が笑いで揺れました。

第一限は井口哲朗先生(高校3回)の国語。先生は昭和三十四年から平成五年までの延二十六年間在職され、現在は石川近代文学館の館長として活躍されています。演題は「北村喜八と中谷吉郎」で小松中学第15回卒業の同級生で、文系・理系それぞれの立場で国際的な活動をした二人の足跡を、年表を対比しながらたどる内容は理解しやすいものでした。

北村喜八は小山内薫に師事、数々の翻訳戯曲集を出し、築地小劇場、芸術小劇場等を結成し、戦後は新劇復興にも尽力、また国際ペン大会には日本代表として出席しています。

昭和初年刊行された「世界戯曲全集」(近代社)は小山内薫監修であるが、小山内亡き後、喜八が受け継ぎ、全四十一巻を完成させたものであることを、井口先生が紹介してくれました。

中谷吉郎は小松中学時代、同校を訪れた木村栄博士のN頂の講演を聴き感動し、理科志望の意を固くしたそうである。雪の結晶の研究から人工雪の研究に進んだことは誰もが知るところであるが、科学者としても、随筆家としても恩師寺田寅彦の正統を継ぐ弟子といわれている。寅彦は、「天災は忘れた頃に来る」と、天災の可能性を指摘するに止めたが、宇吉郎は、それだけでは満足できず、「天からの手紙」を読んでみせたのである。「雪は天から送られた手紙である」この文学的な発



卒後五十年の集い

大土 外男

小松高校を卒業して早や五十年。一九五一年卒の三回生会が「卒後五十年の集い」を八月二十六日、山代温泉、ホテル百万石で行った。快晴のこの日は残暑も厳しく、参加した八十六名(男五十名、女三十六名)は激動の中を生き、齢を重ねて古希を迎えた過ぎし日に思いを馳せ、同期の絆を深め合う集いであった。

卒業時は六百十九名だったが、七十数名が他界していない。朝鮮動乱の翌年、高校を巣立ち、講和条約の発効、経済復興、成長、バブル経済、崩壊と経済の減速、低迷、不況と大きなうねりの半世紀を生きて来たのだ。

開会の冒頭、物故者の冥福を祈り、久し振りの出席の故に乾杯の音頭を指命された中沢弘光君(横浜在住)が感慨を込めて挨拶。初参加の懐かしい顔も見られ、宴席はいつ気にも高揚、かつての悪童、少女に帰り、和気あいあい、盃を交わし語り合う様がそこそこに。やがてカラオケが解禁、演歌や応援歌の高唱で一段と盛り上がった。今回が初参加の判三教君(金沢在住)は学区制の変更で一時期、小松高校に在籍したが卒業は泉丘高校。教職を退いてからライフワークの子供をモチーフにした洋画家

想を科学的に裏づけて見せるのが、宇吉郎の随筆の方法であるが、「雪」の研究をはじめとして種々の研究も同じ方法であったとはいえないだろうか。と井口先生は述べています。また、二人は共に六十二歳でしかも癡で生涯を閉じたということも何かしら不思議な運命を感じました。

第二限は十時三十分からで生物。講師は三井淑朗先生で(中学40回)先生は昭和二十四年から六十一一年までの延べ二十七年間在職され、その優しい人柄と解りやすい授業で多くの生徒から慕われていました。現在は悠々自適の人生を歩んでおられます。

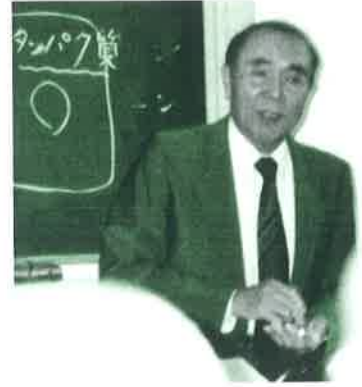


最近のDNA研究にはじまる、ゲノム分析・遺伝子操作・DNAテクノロジ・クローン技術の進歩などと科学の発展はコンピュータとともに、凄いスピードで進んでいる。これからは社会・倫理的な面がいかにこれらの先端技術に追いついて行けるかが問題になるだろうと思われまます。そして将来透明人間や蛍光人間が現れるかもしれないと興味深い楽しい授業でした。

の「剣沢での合宿」時、厳しい岩場をアタック中に見つけた「コウガイビル」からお話が始まり、「コウガイとは昔の女性が髪に刺した飾りに似ているのでそう呼ばれているとのこと。分類上は扁形動物。仲間にはプラナリアがいる。これはクローンになる貴重な実験対象などと、5センチくらいのコウガイビルの生態を詳しく講義していただいた。山よりちり紙とナイロン袋にくるまれて大切に持ち帰ったつもりのコウガイビルは黒いしみとなり乾燥して断片も吹き飛び、先生の「再生」の実験材料は夢と化してしまつたと、無念の思いが伝わってきました。

十二時半より懇親会に移りプラスバンド部の生徒達による「祝典序曲」が演奏され、しばし百周年を思い出していました。続いて鏡割り、乾杯の発声は中学33回の福田さんより行なわれ、立食パーティが始まりました。大阪や東京、千葉からも参加者があり懐かしいホーム写真の定番であった天守台の石段が、こんなに急勾配だったのかと息をはずませ膝をいたわり、学生気分

その後、校庭に出て今建築中の新校舎の説明を清水事務長さん(高校10回)から受けました。講堂と特別教室棟が完成間近で、環境に配慮しリサイクルタイルの使用、雨水を利用して水洗トイレに利用、また屋根には太陽光発電の導入などがなされているそうです。2005年の完成が待たれます。金木犀のほかに香る青雲の小徑をそぞろ歩き、天守台下の特設会場へ移動する。途中にすれ違う生徒達の「こんにちは」の挨拶が嬉しく、さすが我が母校の立派な子供たちだと胸を熱くする。



とは裏腹に還暦を自覚したひとときでもありました。天守台上にはいつの間にか大きな松の木が枝を張り、ススキの生い茂った中でタバコを吸ったなどと今や時効になった話はつきまぜん。また、美術の時間にグロゲロと蛙の鳴く水田に向かって写生をした青雲の小径の土手からの眺めは、今は家、また家しかみられせん。無理もない、四十余年の歳月が経っているのです。鏡割りされた一樽の美味しい酒と上出副会長の流暢な進行に楽しいパーティも終わりに近づき、全員で校歌を声高らかに歌い、12回の長沼副会長の万歳三唱で無事終了いたしました。朝から今にも泣き出しそうな空だったのに、初めてのホームカミングデイを見届けるかのように持ちこたえてくれました。企画、準備、運営にあたった同窓会事務局、役員、学校側の心配りに感謝すると共に、来年もまたすてきなホームカミングデイになる事を期待いたします。

(高校12回)

の生活という。三回生会は卒業後よく集まり、まとまって来た。東京オリンピックで以降、四年毎に集まり、六十歳を越えてからは二年置きに。ここ暫くは頻繁で、母校の百周年記念の折は粟津温泉、法師で前年の定例会に続いて開催、昨年は女性だけの「すずかけ会」が二年毎の例会を。今年の六月には東京、関西の同期会が「五十五年、古希の会」を伊勢・志摩で行ない、石川県内在住者も参加した。その影響か、今回は節目の会であったが、毎回のような百名越えには至らなかった。今度の集いに華を添えたのが同期の吉田美統君(稔、小松在住)の人間国宝(重要無形文化財資格保持者)認定。亡父の跡を継ぎ、卒業間際から地道な研鑽を続け、釉裏金彩の第一人者として認められ、四回卒の徳田八十吉君に続く同窓の快挙であり、席上、花束を贈り祝福した。その吉田君提供の『釉裏金彩花器』を争奪するゴルフコンペが翌日、粟津温泉の加賀芙蓉カントリーで行われた。ゴルフ愛好者が参加、ダブルペリア競技で、北岡英弥君(小松在住)が釉裏金彩の花器を獲得。二位山田耕一郎君(名古屋在住)、三位西野聖君(奈良在住)も吉田君の作品を手にした。三回生の「卒後五十年の会」は、二年後の再会と十一月に東京の同期会が開く毎年の例会に他地区からも参加を決めて終った。

(高校3回)

栄(しげむ)君のこと

林 滋

彼の家族は、敗戦を満州で迎えた。父は邦人学校の校長だったから、両親と五人の子供は空家になっていた郷里の実家に落着いた。彼は小松高校を終えると、後事を兄に託して上京、東京学芸大学に進み教育界を指向、後年父の血を承けて僻地教育を志し、三宅島に渡った。教壇に立ちながら動植物を研究し、島の紹介に努めていたが、定年を迎える頃には、島を「終(つい)の住家」にする決心をしていた。

定年を迎えると、年金生活を楽しみながら、教え子に囲まれた島の生活を著書にまとめていたが、予測もしなかった天災に襲われることとなった。噴火騒動である。

静まることなく全島引き揚げが決定された頃に前後して上梓された「今様浪人へら」三宅島には「地震、噴火、避難」と副題がついていた。

三宅島で刊行すれば教え子などで充分消化出来る筈の冊数であったが、避難先きの仮住いでは思うに任せず、同級生に協力依頼があり、寺井町栗生から一別以来の加藤君がお願いに見えた。私自身も気になって町の図書館とか親戚、知人にお願ひしたのだが殆どに届いていた。年金生活者には、二五〇万円の出費は大変だろうし、何よりも在庫の山は精神的な重圧だろうと気にしていたが、本人

は至ってタフで、続編に取組んでおり、脱稿から出版契約まで考えているようだった。その頃、叔父の出版取材に見えた北國新聞能美総局の工記者が「年末の書評の取材は私がしたのだ」ということで、続編出版の話になり、「良かつたらうちの出版局で」と言われ、彼の電話番号を教えた。ところがその後一向に連絡が無い。思いあまつて電話して見ると、「Kさんには悪いことをした。丁度電話があった時に他で契約がすんだところだったんですよ」と言われる。「おーい待つてくれよ」と口に出かかった。彼からの便りには、前の分の目処がつかないから北國の方の話をつないでいてと書いてあったのに、本人は待つたをかけただけで、別途の契約を終えていた訳である。まあ時間と根気が身上の「学者馬鹿」だから仕方ないかと思っていると、「北國新聞の方は今度何か北陸のことで穴埋めするから」とのこと。

この分では、仮住居でも案外やれるんじゃないかと思つてしよう。そしてまた暫くして彼の甥の嫁さんから「今度、三宅島の兄さんがおいでよ」と言う情報が入った。すぐに電話を入れて帰郷日程を尋ねたが、一回一回これが最後と思うとあれにも会いたい、これにも会いたいで決めかねているようだった。結局、二十四日午後二時間割いて貰えた。

昔の「旧実家」はすでに無いのだが、情報をくれた甥が跡地に新築してお

り、私の長男と無二の親友で、私の同級酒田君の甥でもあって、消えかけた血縁の名残りを留めているからであるし、不思議なことに、彼をはじめ、同級の(故)林孝、田中一静、紺矢通朗、(故)永長武久、一級上の竹内尤夫などは、未だに私の母を「お母様」呼ばわりをして、使りは必ず連名でくれている位の間柄だからである。そしてその日、彼が満州につく「第二の故里」という辰口町上開発に新築なつた生涯教育の館「若葉会館」で演壇に立った。

会場には同級生はじめ五十人あまりの高齢者グループの例会がセットされ、定刻に母校小松高校等を巡つた同級生アツシーと現われ、「私の昔と今」の演題で約二時間、時には目を潤ませながら熱弁を振るい、名残り惜しげに、次の予定、酒井町長らが待つ寺井町に去つて行つた。本当は両親の墓参をすべきなのと言いなから、第三の故里は三宅島、第四の故里は現在地寅さんの柴又と「人生到るところ青山あり」を説き、自らも死ぬまで勉強と大学院生生活を続けながら、馴れないワープロを駆使しながら著作に専念している。彼こそ生涯小松高校生であり、最後の故里は小松高校なのだと思つたものである。

彼の名は、村栄(高校4回生)

(中学46回)

朝の読書運動

松本とし子

朝の読書運動と言つものが有ると聞いた。朝授業に入る前に十分か十五分全校一斉に、本を読むのださうである。その時間は児童も先生も机に向かい手にした本を一心に読む、そこには穏やかで豊かな時が流れ一人ひとりの児童が真に読書にたのしみ風景があるといふ。十一月十八日の朝日新聞に、或る学校の例が出ていたが、不登校や教師に対する反抗などで、荒れていた学校が子供達の学力も上がり、心豊かな明るい学校になつたと書かれていた。

我々の若い頃は、日本人は世界一読書好きと言われていたのに、この頃は読書離れが甚だしいと聞く。読書嫌いは学力の低下にも繋がり、また勉強嫌いにも繋がつていると思われる。私は小さい時から読書が大変楽しかったので、誰でも読書は楽しいものだと思つていた。しかし家の孫もテレビの影響があまり本は読まない。

朝の読書運動によつて、読書の楽しさに目覚める子供達を、増やすことが出来たらとどんなに素晴らしいことだろう。それには、本を揃える努力も必要だろうし、その資金も必要と思われる。しかし、そのための募金だったら、きつと寄付に応じてくれる人も多いのではないだろうか。

日本の若い世代に、良い本に親しむ機会を与えてやれるよう努力するようには、私達に希望と勇気を与えてくれるといふことだ。

(県女28回)

江戸東京たてもの園

柿原 秀嶺

東京都小金井市に約二十万坪の小金井公園があり、その一画約二万坪に江戸東京建物園と称して、江戸から昭和初期の東京下町の銭湯、小間物屋、和傘屋等が約十軒、田園調布に在った当時の所謂文化住宅が数軒、江戸時代の豪農や下級武士の家が四軒、合計約二十棟が移築保存され、年間約十五万人の見学者で賑わっております。昭和十一年所謂二二六事件で兇弾にたおれた名蔵相高橋是清氏邸も当日の現場がそのまま保存されております。このうち江戸時代の四軒は茅葺き屋根ですので、その保護(虫除け)のため、薪をくべ、その煙でくすぶらせています。この方法で四十年程保つと見込んでいます。こうしないと十年で葺き替えが必要となり莫大な費用が要ります。資材と職人の不足が原因です。この新割りと新しくべの作業をすべてボランティア約八十人の無料奉仕で支えているのです。

私は水曜班の一員として、この武士の家で薪くべをやっておりますが、ここを訪れる老若男女の言動をみききするにつけ、時代の移り変わりに今昔の感を深くしております。

御参考までに二、三列挙してみます。その一、つい五、六十年程以前は、日本では東京でさえこれが普通であった汲み取り式便所。四十才前後ま

での人は排泄物がどう処理されていたか、私の説明で初めて知るようです。昔これが田畑の肥料として使用されていたことを知っているのは六十才前後以上でしょうか。それでもこれは武士の家だったので、家の隅に内便所があるので、一般農家は殆ど屋外便所であったと説明すると皆「へえー」という顔になる。

その二、武士といつても半士半農でしたから、屋外での野良仕事を終え、帰宅すると、玄関脇にある行水場で体を洗うような設備にしておりますが、「この「行水」という言葉が、若い人の中には理解出来ない人もあります。私の説明の後、帰りがけに連れの友人に「あなた、キョーズイって何だか判じた?」「ささやいてるのです。老人にとつて懐かしい「行水」も今や死語となりつつあるようです。そこで私は「今でいうシャワールームですよ」と説明するのことにしています。

その三、理解の一助にと、茅の使い残し一把と、違いを比べてみられるよう稲藁を一把、土間の隅に置いてあるのですが、「これが米のなる稲の方だよ」という私の説明に、「米ってコンビニで作っているんじゃないの?」と不思議そうな顔をした少年がいました。これが今の東京の現実なのです。地方の田園地帯では想像も出来ないでしょう。若年層すべてとは申しませんが。

ところで、多い日は十人程、少ない日でも数人は、日本語の通じない外

国人の姿をみます。

私は日本家屋特有の床の間、濡れ縁、違い棚、欄間、躰、長押、式台、たたき、かまど等々を英語で何と表現するか、頭に叩き込んでおいて、これに應對しております。この時はいつも六十五年も昔、小松中学での恩師、鈴木、稲葉、古川の各先生方が草場の陰で恐らく苦笑されながら、この柿原の姿を見ていて下さると思ひ、首を縮めて、胸を熱くしております。これが又私のボケ防止ともなっておりますが、なつかしきかな天守台。有難きかな諸先生の御恩。唯合掌あるのみ。

御参考まで。
たたき(土間、二和土)は earthen floor
かまど cooking stove
式台(お客用の特別の玄関) raising platform
さて、違い棚、長押、仏間、納戸等々...

英語で何と表現してよいか、おじまな時にどうぞごうぞぞ。
(中37回)

中谷宇吉郎展に参加して

北山 寛子

七月三十一日〜八月十二日まで、東京銀座の「アート・ミュージアム・ギンザ」にて「地球とあそぶ達人 中谷宇吉郎展」の開催を紙上で拝見しました。

加賀市にできた「雪の科学館」を見に行く機会がなかったため、銀座なら

手軽に行けると出かけました。会場には小中学生の夏休み宿題の手助けにもなる「雪を作る実験教室」も設けられてあり、大勢の人々が賑わっていました。

「雪を降らせる「クーナー」や南極の水の厚さ、紀元前の年号と地点を印づけた白い柱が十何本建っていて、南極地点観測に関わられた中谷博士の研究の偉大さを知る事が出来ました。その他「幼少の頃よりの記念写真が貼られてあり、その何れにも穏やかな博士のお顔と真剣に実験に取組んでおられるお姿が見られました。

第一日は有馬郁人氏の講演でした。中谷博士のお人柄、特に学生を愛し、学問への探求心に溢れた御一生は郷土の誇りとして、亡き父の同級生として抱いていた博士への敬愛の念一層深まるいお話でした。特に権勢欲の無い学者肌の中谷博士の面目躍如としての人となりを知り、改めてお話し下さいました有馬郁人氏に感謝の念さえ浮かびました。

雪の科学館長が加賀市より上京され、会場作りにお心を尽くされたこと、中谷博士のご令嬢、中谷芙二子様にお目にかかれたこと、雪の折紙を考えられた富山大学の教授より難解な折り方をお習いしたこと、雪の万華鏡作りを習って一本作ったこと、暑い盛りの七月から八月はじめにかけて、暑さも忘れてよい思い出作りに浸らせて頂きました。

(県女27回)

先輩・後輩

城田賢一

小生の住んでいる藤枝市（静岡県）は奇妙な縁で、郷里松任市と姉妹都市になっている。色々と交流が盛んであるが、その中に、市役所職員の交流事業がある。毎年係長クラスの方が一年交替で勤務している。今年はいくんな人かなと、楽しみにしていると、なんと小生の生家から程遠からぬ新興団地に住んでおられる方が来藤。早速歓迎の電話をし、御来宅願ったところ、これまたびっくり小松高校の出身、審査係長といふ、いかつい職名に拘らず、細身・面長の手弱女。郷里を離れると、古里の匂いのするものはなんでも懐かしい。先輩、これ又好いものだ。戦争中の昭和十八年二月南洋諸島の一つ「トラック」島に行った時の事である。着いたのは「春島」、飛行場は海軍が急造拡張工事中であった。その工事人は通称「青隊・アオタイ」と呼ばれた囚人部隊。監督はカーキ色の半ズボン、白のストッキング、黒短靴、白の開襟、それに防暑ヘルメット。陸軍の我々に比べ極めてスマートに見えた。

モッコとシャベル・ツルハシのノロノロ作業、囚人達は陽に焼けて真っ黒。八時現場、十時休憩、十二時宿舎？刑務所？昼食、十三時には作業現場へ行進、十五時再び休憩、十七時作業終了宿舎へ御帰還。夕食が済んだと思う頃青い着物に小ざっぱりと衣替、三々五々

海岸の御散歩。十時と三時の休憩にはお茶と間食。陸軍の兵隊と比べると、囚人達は天国の生活。兵站を持たない惨めさをしみじみ味わう。

仕事も一段落したある日、刑務所見学を思い立った。事務所は囚人達から離れた場所である。案内を乞うと快く事務所に招き入れ、飲み物の馳走になった。色々と話している内に、石川泉の御出身、しかも小松中学の先輩と判る。お互い奇遇に吃驚。先輩の仕事は教師で格別仕事もないから、ゆっくりしろと言われるままに、我が家に帰った時のようにのんびり休ませて頂いた。先輩の本職はこれまた僧侶、これがほんとうの「地獄で仏」。その後二ヶ月ほど何かと親切にして頂いた。

一別後多忙に紛れ御尊名を失念し誠に残念至極に思っている。その後トラック島の大空襲等聞くたびに、先輩の安否が心配でならなかった。

秋山豊次陸軍中将・中学第九回卒・美川町、想出の将軍である。閣下は航空兵団に強い信念をお持ちで、陸軍大学でも航空作戦を担当しておられた。苛烈な二ユーギニヤ戦線で第四航空軍参謀長、御本人としても誠に不本意な作戦指導を強いられ、お気の毒でならない。閣下の遺品は、航空自衛隊小松基地に保管展示されている。閣下が戦地へ出発に際し、皇后陛下から下賜された饅節のお裾分けを頂いたのも懐かしい想出で

ある。

付記
一、手弱女は四藤佐和子嬢・高校第三十九回卒・松任市
二、トラック島での先輩は級友森田隆志君の調査に拠れば、藤田正英氏・第二十九回卒、復員後小松市木場町光泉寺住職、残念ながら三年程前亡くなられた由、そのお嬢様が奇しくも級友山岸文衛君の御子息のお嫁さん。本当に不思議な縁と感無量。
合掌
(中学34回)

スーベニール

中村 照子

石川県立小松高等女学校と書かれた門の中に、プラタナスの並木があり、運動場越しにピノクの（？）と書いても今の小松高校の記念館のように濃いピノクではない）講堂があった。

その講堂では、一寸太りぎみの山崎茂之校長先生の毎朝の朝礼が、似合っていた。また、その講堂にはよく集合させられた。十二月八日、大本営発表の真珠湾攻撃で始まった、大東亜戦争の宣戦布告を知らされたのもこの講堂で、その頃、戦勝気分の発表の数々を、軍艦マーチと共に聞かされたものでした。

講堂にはその当時珍しかったグランドピアノが置いてあって、四谷文子先生の独唱会が催されたこともあったし、辻久子先生のバイオリンの演奏会もあった。初めて

聞いた、スーベニールは乙女心に、それは砂漠に水の表現びったり、沁みこんでいきました。

今も、お元気な尾坂先生には名曲の数々を沢山、沢山教えて戴きました。

春爛漫、しのしかりが、江戸っ子の国語の先生の口を、光をしかりと発音されていたことがなつかしい。金曜日がちん曜日と聞こえるお裁縫の先生は東北の御出身。静岡、広島、大阪と先生方は全国から見えていました。

奈良の女高師を卒業されたばかりの若い先生は数学でした。一限毎に教室をかわって歩くので、お裁縫とか手芸、書道など荷物の多い日は大変で、ゲルマン民族の大移動とはさこそ、といった格好。何しろ全校生徒が移動するのですから。戦時中なので勤労奉仕はよくしましたけれど、私達の学年はまだ授業が欠けるといったことはありませんでした。

そうそう、一昨年は小松高校百周年でしたが、在学中の三年生の時、創立三十周年の記念式典が、運動場一パイに張ったテントの中で行われました。この私がセーラー服で参加していたなんて、想像出来ますか？

(県女31回)



ピンフー会(平和会)?

谷口 昭一

二十世紀初頭、古希に達した。歳を取ると若い頃、そして、その友を懐かしく思うものらしい。

昭和二十年八月十五日当時中学二年、小松飛行場建設の学徒動員で浜佐美に泊まり込んだ。その日は、夏休めで家に帰っていた。玉音放送は、何を言っているのかよく分らない。午後になって敗戦のことが知った。

以来学校では、柔剣道部は消え、陸上競技・水泳・野球・バレー・軟式テニス等々様変わりした。

庭球部に入った。放課後は、テニスとマーシャで明け暮れの日々であった。テニスでは、昭和二十二年・二十三年と白尾先生に引率され、二度に亘り、蒸気機関車に乗り、煤煙で鼻の穴を真っ黒にして、新潟に遠征したこともあった。麻雀は、いわゆる、アルシヤール麻雀である。ピンフー(平和)がその代表である。我が家の自分の部屋の壁に、その日その日の勝負の点数を記載した成績表を長々と貼り付け、一喜一憂していた。いつしかこのテニスと麻雀でのメンバーで、仲良し八人が結束し、平和(ピンフー)会と命名し、

以来今日までも友情は続いている。初老に達したときは、前役後役と二回続けて、八名全員で伊勢神宮に参拝した。毎年みんなで温泉一泊も楽しんでいた。

平和会八人メンバー最年少者高校三年

回の富岡司郎氏が、入院数か月の昭和五十八年のお旅祭りの前々日に、五十歳の若さで突然逝った。今は七名となって、幾分か疎遠になっているが、機会あるごとに安否を確かめあっている。「天守台」二十二号の送付があり、

石田新校長様や金沢支部の前坂様の記事を読み、急に平成十三年七月「サンルート小松」での同窓会の帰り、金沢までの電車で、この西氏と一緒したことを思い出し、本会報に投稿する気になった次第である。

追伸
我田引水、平和会の宣伝みたいで恐縮だが、このメンバーは次のとおりである。

- 小西敏春(中学45回)・魚谷修三・勝木道夫・角井久男・林俊平・東野永治(以上は小生と同期)・故富岡司郎の各氏。

(高校2回)

ふるさとを遠きにありて

上田 次兵衛

昭和三十四年三月高校卒業の我々第一期生も昨年从今年にかけて還暦を迎えました。

昭和五十一年から続いている同期の関東地区同窓会では、還暦とミレニアムが重なった昨年(平成十二年)は、関西の仲間と合同の会を京都は木屋町「松華楼」で賑やかに開催しました。卒業以来初めて会う人も多く夜の更けるまで楽しく語り合いました。翌日は

三十三年ぶりに御開帳の清水寺御本尊や丁度ライトアップ中だった高台寺などを参拝し、晩冬の京都を堪能してきました。

今年はや、元へ戻って東京都内での同窓会でしたが、初参加三名を含め二十九名が集まりました。昔に比べて交通は格段に便利で早くなったとは言え、東京とふるさと小松はやはり遠く、年一回顔を合わせる毎に、犀星の「ふるさと」は遠きにありて…を実感し合っています。我々の会では四年前から欠八ガキの通信欄をそのまま「ピー」して、「三二文集」として席上配布していますが、その中から二つほど御披露させていただきます。

「又し振りに小松に帰ったが、空港付近もすっかり変り、昔小川でどじょうを取って走り廻っていた風景はどこにもない。道で会う人も実家の近くなのに見知らぬ顔ばかり。浦島太郎のような気持でした。しばらくぶらぶら歩いてみると向うからしわくちゃんにやせて真黒の顔の男が歩いて来る。よく見ると先方が白い歯を出して笑ったので思い出した。三歳下の従弟で、先方が感動しているのに何ともなさない話でした。」(UKK君)

「歌舞伎町の雑居ビル火災やアメリカの連続テロ事件等、物騒な暗い出来事が多い中、高橋尚子選手やイチローの大活躍で少しは救われた感じがします。来年のNHK大河ドラマは加賀百万石物語『利家とまつ』との事、これから来年にかけて、故郷は大いにフィー

バー(することでしょう。)(TT君)(高校11回)

関東三二会高校9回(報告)

小倉 新一

小松高校関東地区三二会が十二月一日土曜日午後二時から、東京都区内皇居そばパレスサイドビル内のティールーム「花」で行われた。二年おきの恒例で、前回は一九九九年十二月、きっかり二年後である。

今回の幹事役は神奈川県が当番というところで、上田武君と太田恵以子さんのお世話をお願いした。

東京、千葉、埼玉、神奈川、その他の関東一円に在住する三二会会員七十六名から二十七名が参加した。常任幹事の徳山順一君の挨拶、初参加(?)の西川若雄君(埼玉県熊谷市)による乾杯が始まった。還暦を過ぎた三二会のことでもあり、会合のために弔報の紹介をしているが、越野達雄君から、美川町の藤田美代子さんが亡くなられたとの紹介があった。参加者一同起立、献杯で追悼の意を表した。

会場「花」のは小松高校一期先輩(八期)の岡田さんが経営するお店で、これまで一、二度お世話になっていた。

この日も郷里の食べ物(お寿司や昆布巻き)、お酒が振舞われた。それよりも何よりもマスターの、完全な(?)小松井が最大のこの馳走であったかもしれない。

(高校9回)

2001年度小松高校 部活動の記録

Table with columns: 部活動 (Sports/Activities), 大会名 (Tournament Name), 種目 (Category), 成績 (Results), 氏名 (Names), 備考 (Remarks). Rows include categories like 陸上 (Track & Field), 水泳 (Swimming), 弓道 (Archery), テニス (Tennis), etc.

六十歳になった時点から 河原キク子
子を育て孫を育てて、ようやく自分の自由になる時間を、少しは持てるようになりまして。それは丁度還暦を迎えた年で、遅まきながら堰を切ったように好きな趣味の世界へのめり込みました。
手当たり次第と言いつ訳でもありませんが、どれ一つとってみても学びたい事はかりでした。俳句、川柳、短歌、詩、エッセー、ちぎり絵、手まりかがり、日本画、習字、生け花、茶の湯などに打ち込んで、とどまる事も知らぬ有様でした。

他にも習いたい事、例えば水泳、体操やコーラスなどと、いろいろあります。
たが、あいにくとその日が重なったりして残念ながら、あきらめたものでした。それに内職の仕立て物や編み物と、畑仕事も少しして居ましたので、十年は瞬間間に過ぎ去ってしまいました。
たかが趣味されど趣味、取り掛かった以上は、ある程度の線まで行きたいと思つのは人の常で、楽しい事はかりとは限りませんでした。気が付けば七十歳になって居ました。そこで何時までも若くはないのだと自分に言い聞かせ、趣味も徐徐に減らしてゆく事にしました。

今では俳句、短歌、詩、エッセー、ちぎり絵、日本画、生け花などになりました。下手の横好きの作品ですが、ほんの細やかな賞も何度か頂きました。
また近年になって、海外旅行もする事ができました。一回目は娘の家族たちとフランスへ、二回目は孫娘とイタリアへ、三回目は同じく孫娘とオーストラリアへ行って来ました。これらの旅は私の俳句や短歌に、詩やエッセーに、またはちぎり絵などの作品に、表現する事が出来ました。
私は今のところ至って健康であり、家の者たちには好きな事をさせてもらい、多くの良き友達にも恵まれ、深く感謝して日々を暮らしております。さて私も遂に喜寿を迎えてしまいました。いよいよ寄る年波でこれからは、作品なども覚束なくなるばかりだと思います。今後はあまり緊張らずに、ゆつくり行こうと思っております。

(市女14回)

本部だより

◆新年あけましておめでとうございます。
本年も会員の声や同窓会活動の紹介、学校の現状など楽しい誌面を作りたいと思いますので、ご協力の程よろしくお願いします。

同窓会編集委員

- 委員長 宮西 勉夫(高校9回)
委員 安田 進一郎(中学45回)

同窓会事務局

- 村井 恭子(高校34回)
学校職員 北 本 健

- 東出 和夫
村 戸 徹
弥久保 悦朗
北澤 敬美

第24号の原稿募集

- ◎切 平成14年5月30日
◎内容 自由(在学中の思い出、同期の催し、近況報告など)

◎送先 〒923-1864 小松市丸内町二の丸15

◎発行 平成14年7月 小松同窓会事務局宛